

ベルクソンにおける創造と製作

金子智太郎

序論

本論の目的はベルクソンの創造 (*création*) と製作 (*fabrication*) についての考察にもとづいて芸術制作を論じることである。最初に序論として、ベルクソン美学研究史を振り返って芸術制作がどのように論じられていたかを見た後で、本論の主旨をより詳しく説明しよう。

しかし生命の創造性を徹底して強調したベルクソンによる美学が受容美学でしかないという結論には当然疑問が生じるはずである。実際ベルクソンは「創造的進化」などで芸術制作の創造性に何度も言及していた。初期の研究者は先の受容的な芸術論を芸術制作論と結びつけることができなかつたと言えるのであるかという問題は常に論争点のひとつだったと言えるだろう。

「アンリ・ベルクソンの美学」(1941) を著したバイエら初期の研究者は、ベルクソン美学は芸術制作論を欠いた受容美学であると考えていた⁽¹⁾。ベルクソンは「笑い」(1900)、第三主著「創造的進化」(1907)、論文集「思考と動くもの」(1934)などにおいて、芸術家は直観 (*intuition*) によってモチーフの生命

的図式についての美学的研究など、ベルクソン美学における芸術制作論に対する関心は高まっていると言えるだらう⁽³⁾。

本論で私はベルクソン美学において芸術制作を論じるためのこれまでとは異なるアプローチを提示したい。まず、ベルクソンが芸術制作における創造と製作の関係について論じた短い文章を出発点とする。ベルクソンは論文集「思考と動くもの」所収の「可能的なものと実在的なもの」において、芸術における創造と製作という二つの行為を区別し、後者は芸術家の技術(technique)と関わると述べていた⁽⁴⁾。まず私はこのような二つの行為を含むものを芸術制作と呼ぶことにする。そして二つの行為の区別と関係を手がかりとしてベルクソン美学における芸術制作論を考察したい。芸術制作をこのように考へるのは、創造と製作はベルクソンが区別しているとおりまったく異なるにもかかわらず、後に示すようにある重要な関係があり、そのため両者とも芸術に不可欠と考えられるからである。本論ではまずベルクソンが創造一般、つまり生命による創造、および製作一般をどのように考へていたのかを理解することに努めた。初期の研究者が批判するとおり、芸術制作そのものについてのベルクソンの記述はほとんどが短く、具体性に欠けているからだ。ベルクソンは多くの著作のなかで芸術家による芸術作品の創造を生命による創造の範例とみなしていた。ということは逆に生命による創造と製作の区別および関係の考察から、芸術家による芸術制作を理解することができるだろう。

第一節 創造と製作の区別

本節ではベルクソンが芸術制作における二つの行為である創造と製作をどのように区別するかを論じる⁽⁵⁾。ベルクソンによれば、創造が容易に製作と混同されるために、創造概念は一般的に誤解されている。ベルクソン哲学において製作とは生命の特殊な行為であるのに対し、創造とは生命の在り方そのものであると言える⁽⁶⁾。そして創造と製作の区別は生命と物質の区別に対応している。創造を理解するには、知性に馴染み深い物

本論はこの序論、および第一、第二節、そして結論からなる。第一、第二節ではベルクソン哲学における創造一般、製作一般を考察する。まず第一節では創造と製作の区別を論じる。特にベルクソン哲学のライトモチーフである独自の創造概念を製作との詳細な対比によってできるだけ明確に理解したい。ベルクソンは、創造が容易に製作と混同されるために、創造概念は一般的に誤解されていると考えている。次に第二節では、第一節で区別した創造と製作の関係を論じる。両者の関係を理解するために特に重要なのは製作という行為の目的である。最後に結論として芸術制作における創造と製作の区別および関係を検討する。特に両者の関係についての考察はベルクソン美学研究においてこれまであまり強調されてこなかつたが、芸術制作論に不可欠と言えるだろう。

質の在り方とは本性的に異なる、生命の在り方をできるだけ明確にすることが重要である。

生命の在り方を考察する前に、ベルクソン創造論の展開について簡単に触れておこう。創造は第一主著『意識に直接与えられたものについての試論』(1889)から論じられた持続とは異なる、直觀と同様、ベルクソン哲学の展開のなかで次第に中心的主題となつていった。第一主著、および第二主著『物質と記憶』においては自由論が中心であり、創造論はまだ展開されていない。ただ『物質と記憶』においては自由と創造の結びつきが指摘されている¹²。創造が中心的主題になるのは『創造的進化』からである。第四主著『道徳と宗教の二源泉』(1932)においては、ベルクソンは創造を情動(emotion)や愛(amour)と関係づける。本論では第三主著から第四主著への展開については詳しく論じないが、私は両著の創造論は連続しているといふ瀧一郎らの見解に同意する¹³。そこで本論では簡略化のために情動などについての議論は省略し、『創造的進化』における創造論を主に検討する。

創造は生命の在り方そのものであり、ベルクソンはそれを持続(durée)と呼ぶ。持続とは絶えず変化する流れのようなものと言うことができる。持続を捉えるには物質の運動を捉えるときのように対象の外部に停止した視点を置くことはできない。なぜなら簡単に言えば、停止した視点が捉えるものは停止したものだけであり、停止したものによつて変化を作ることは

できないからである。持続を捉えるには視点を変化する持続の内部に置き、持続とともに絶えず変化させる必要がある。このような視点の内在が生命を捉える直觀の特徴のひとつである¹⁴。

直觀によつて捉えられる持続の特徴からベルクソンの創造概念を理解するためには重要なものをまとめ、持続はなぜ創造的なかを説明しよう。ベルクソンによれば、自己を外部からではなく内部から捉えようとするとき、停止も分割もない生命の連續的な変化を捉えることができる。持続の変化は、それ自体は変化せず相互に孤立したものの変化ではなく、質的な変化である。言いかえれば、持続には変化する実体ではなく、むしろ変化が持続の実体である¹⁵。では、このような持続の変化はなぜ創造的なのか。それぞれの瞬間ににおける状態が相互に孤立していいる物質とは異なり、持続は連続的であるため、持続の現在は過去全体と連続している。言いかえれば持続の過去は現在に保存されている。物質の未来の状態は相互に孤立した瞬間に変数にとることで予見できるが、持続の現在は過去全体と連続しているために、持続は一度と同じ現在を通らない¹⁶。そのため持続は常に新しく、絶えず創造的に変化する。他にもベルクソンの創造概念を理解するために重要な持続の特徴に、持続が実在的であることがあげられる。持続は物質と本性的に区別されるが、だからといって心理的存在でも、観念的存在でも、可能的存在でもなく、実在的、具体的で、充実している。

他方、ベルクソンは『創造的進化』において製作とは素材に

形式を与えることであると述べている⁽²⁾。形式は実在的な素材とは異なり、観念的、可能的存在である。形式に従うことがで

きるよう、素材自体は変化せず相互に孤立したものである必要がある。そのため製作における素材は物質によつて実在化する行為は可能な形式を素材である物質によつて実在化することであるとも言える。そしてベルクソンによれば、素材に形式を与える製作という行為と知性という能力は非常に密接な関係をもつてゐる。本論ではベルクソン知性論について、知性の極めて多様な機能についての説明をほとんど省略しなければならないが、ここでは少なくともベルクソンが知性は本来、製作する能力であり、形式と素材の関係を認識する能力であると考へていることを確認しておこう⁽³⁾。知性の他のさまざま重要な機能、例えば一般的な認識などはすべてここから派生したものである⁽⁴⁾。

ベルクソン哲学における製作は、変化せず相互に孤立した素材の構成 (composition)、配列 (arrangement) のみに関わると言つていい。そして素材の組み合わせは理論的には完全に予見可能である。そのためベルクソンは製作という行為によって新しいものが生まれることはないと言ふ。言いかえれば製作は同じものを繰り返し生み出す行為である。そして製作する能力である知性は創造を説明できない。「発明についての知性による説明は常に、予見不可能で新しいものを別の秩序に配列された既知の古い要素に帰してしまうことからなる。」

(EC.165.)

る⁽¹⁾。これらの擬似創造概念との対比によつて、ベルクソン哲学における創造概念の特徴をより明確にできる。例えばベルクソンは秩序付与としての創造について次のように述べている。

どのように規則が不規則なものに課されるのか、形式が素材に課されるのか。〔中略〕この問題は古代において存在の問題だった後、近代において認識の問題となつたが、同じ種類の錯覚から生じた。無秩序の観念が規定された意味をもつのは人間の産業の領域、われわれが言うような製作の領域だけであつて、創造の領域ではないことを考えれば、この問題は消失する。(PM.108.)

持続の創造は自己による自己の連続的な創造である。この自己とは絶えず変化し、変化が実体であるような自己である。このような持続の創造をそれ自体は変化せず相互に孤立したものによつて構成しようとするならば、擬似創造概念が作られてしまうと言えるだろう。ベルクソンは創造されたもの（被造物）、創造するもの（創造者）から創造を考えることはできないと述べている⁽²⁾。またベルクソンは持続の自己創造を成長(croissance)に喻えている⁽³⁾。ただしの成長は加算の意味をまったくもつていない。擬似創造概念に共通して言えるのは創造がある種の加算とみなしていることである⁽⁴⁾。数は本性的に停止し非連続な物質の世界でのみ意味をもつ。持続の創造は

無に存在が加えられることでも、無秩序に秩序が加えられることでも、可能的なものに実在性が加えられることでもない。他方、ジャンケレヴィッヂの言葉を借りると「製作的労働は行為の進展に比例して生産物が量的、空間的に増加する唯一の労働である」⁽⁵⁾。

第二節 創造と製作の関係

本節では前節で区別した創造と製作の関係を論じる。序論で述べたように、ベルクソンは創造と製作がともに芸術に関わると考えた。そして前節で見たとおり、ベルクソン哲学における創造とは自己以外の何にも支えられない自己創造だから、創造と製作の関係では創造が主導的で製作が従属的であることは明らかだ。では製作はどのように創造に関わるのか。結論から先に述べておこう。ベルクソン自身の言葉ではないが、製作という行為の目的は生命の創造を補助することである⁽⁶⁾。ただし生命の創造そのものを補助するのではなく、生命と物質の衝突において生命を補助する。ベルクソンは【創造的進化】において次のように述べている。

生命の跳躍(*élan de vie*)は絶対的には創造することができない。なぜなら物質と、つまり自己の運動とは反対の運動とともに衝突する(*rencontrer*)からである。しかし生命の

跳躍は必然性そのものである物質を捉えて、そこにつけるだけ多くの非決定と自由を導入することを目指す。(EC.252.)

ここで述べられているように、生命は創造のために物質との衝突を回避する必要がある。このとき製作という行為が物質の内に非決定を作り出すことで、この衝突を回避するため役立つのである。この意味で製作および知性は生命の創造を補助している。

まず生命と物質の衝突について説明しよう。この衝突を理解するためにまず前節で区別した生命と物質を関係づける必要がある。ベルクソンは「物質と記憶」において哲学の方法には二つの契機がある」と示唆していく⁽²⁾。この二契機は簡単に、差異化 (differentiation 微分) と統合 (intégration 積分) と呼ぶことができる⁽²⁾。方法の第一契機、差異化の契機においては、直観によって生命を捉え、生命と物質を本性的に区別し、持続を物質との対比によって正確に理解することが重要である。この契機は物質と生命の二元論である。そして方法の第二契機、統合の契機においては、生命だけでなく物質も直観によって捉え、生命と物質を関係づけることが重要になる。直観によって捉えることで、物質が相対的に弛緩する傾向をもち、限りなく非連続、停止に近づく持続であることがわかる⁽²⁾。このとき逆に生命は相対的に収縮する傾向をもつ持続として捉え直される。また生命と物質の本性的区別は持続の収縮と弛緩の程度の

区別として捉え直される⁽²⁾。すべてが持続であり、方法の第二契機、統合の契機は持続の一元論である。この契機において持続の実在性が強調される。停止したものがから変化を作ることはできないが、変化から停止を作ることはできる。言いかえれば停止は変化のある程度とみなすことができる。よって停止したものではなく、変化するもののない変化の方が実在的である。ともに実在的な反対方向の持続の二傾向である生命と物質が、現在において衝突している。生命は何にも支えられることなく新しい質を創造しようとするが、物質は現在を反復しようとする。

製作という行為の目的、および知性の役割はこのような衝突において生命を補助することだろう。ベルクソンは次のように述べている。

製作することは物質に形式を与えること、物質を柔らかにし、折り曲げること、物質の支配者になるために物質を道具に変えることである。この支配が人間にもたらす利益は発明个体の物質的成果がもたらす利益よりもはるかに大きい。(EC.184.)

生命による物質の支配とは、物質の内に非決定を作り出し、物質の反復を妨げることに他ならないだろう。物質を支配し、非決定を作り出すことで製作は創造を補助する。前節で述べたと

おり、知性は製作する能力と言えるが、知性という能力の役割

は単に製作することでも、形式と素材の関係を認識することでもない。そうではなく、ベルクソンの言葉で言えば「知性による物質の掌握は物質に捕えられた何かを自由に通らせるることを主要な目的としていた」(EC.184)。さらにベルクソンは知性が言語を構築し、社会を組織することで非決定を飛躍的に大きくすると考える⁽²⁵⁾。

ここで創造と製作の関係をできるだけ明確にしておこう。製作が行われない場合、生命の創造は物質の反復とともに衝突することになる。しかしベルクソンによればこのとき創造がまったく不可能になるわけではない⁽²⁶⁾。このことをふまえて次のように言うことができる。創造と製作はまったく異なるにもかかわらず、生命は物質との衝突を回避するために製作という行為、知性という能力を創造した。この意味で創造は製作の条件であり、製作を創造の一部とみなすこともできる。

製作は非決定を作り出すことで創造を補助するというベルクソンの議論は、これまでのベルクソン美学研究においてそれは強調されてこなかったと言えるだろう。その理由はこれまでの研究の中心が直観論、受容論にあつたからかもしれない。創造の補助についての理解をより深めるため、ここで三つの補足的説明を加えよう。製作および知性以外の創造の補助について、創造の補助が抱える困難について、創造の補助の方法論的な重

要性についてである。

ベルクソンは生命が製作、知性以外にもさまざまな補助を創造したと考える。詳しい説明は省略するが、ベルクソンは「創造的進化」において、生命は二分化によつて扇状に進化するという独自の進化論を展開した。本論で注目したいのはそれぞれの進化の線が特徴となる創造の補助を創造し、それを強化することである。動物と植物に分化する以前の生物は有機体という特徴をもつ。動物の線は神経系または知覚、植物の線は葉緑素という特徴をもつ。動物から分化する脊椎動物と節足動物の特徴は知性と本能である。これらの特徴は知性と同様、物質の内に非決定を作り出すと考えることができる。それぞれの特徴が非決定を作り出す方法はまったく異なるが、さまざまなかつての働きには結びつきがある。分化する進化の線の特徴は分化した線に受け継がれ、分化した線の特徴の働きは受け継いだ特徴の働きを前提している。例えば神経系は有機体なしでは働かないし、知性は知覚なしでは働かない。また特徴相互の特殊な結びつきもある。例えば動物は植物の葉緑素の働きに依存している。このような進化の線の特徴についての極めて独特な議論は、ベルクソン哲学のさまざまな議論、例えば有機体を生命そのものと区別する有機体論や、知覚を物質のメカニズムとみなす知覚論などにもとづいている。

ベルクソンは有機体の最も基本的な役割を、エネルギーを蓄積し、爆発させることと考える⁽²⁷⁾。有機体はエネルギーを爆発

させる」とで物質の内に非決定を作り出し、生命の創造を補助している。ベルクソンは生命と有機体を同一視することもなければ、有機体の目的が自己を保存することだとも考へない。また、ベルクソンは「物質と知覚」の知覚論においても、神経系、知覚の役割は認識ではなく、非決定を作り出すことであると述べている⁽³⁰⁾。ベルクソン知覚論の有名なテーマ、例えば知覚される対象と対象の知覚は同じものであり、同じ場所にあるとか、知覚がどのように生まれるかではなく、どのように限定されるかを説明する必要があるなどは、生命の創造の補助という神経系の役割の規定と結びついている。では神経系または知覚はどのように非決定を作り出すのか。ベルクソンは神経系を、外部の物質からの作用を受け、反作用を身体の行為として返す通路と考える。この通路の途中で大脑は物質からの作用を無数の反作用に同時に接続することができる⁽³¹⁾。そして反作用どうしを相殺することで作用、反作用の必然的な結合を断ち切り、非決定を作り出す。ベルクソンの言葉で言えば、「反射運動を内部分裂させて支配する」(EC 265)。知性による製作もこのようない創造の補助のひとつ、さまざまな方法の内のひとつであり、それぞれの方法との結びつきのなかで働いていふと言えるだろう。

次にこれらの創造の補助が抱える困難について説明しよう。物質の内に非決定を作り出すメカニズムは機能の微妙なバランスを必要とする。機能のバランスが崩れるだけで、メカニズム

は見かけの上で維持されるが、非決定を作り出すことができないくなってしまう。例えば有機体はエネルギーの蓄積と爆発という二つの機能のバランスが不可欠である。このバランスが蓄積に傾くと、有機体は維持されたまま、非決定を作り出せなくなる⁽³²⁾。また、神経系は反作用どうしを相殺するために無数の反作用を作り出しが、すべての反作用のバランスを保つ必要があるだろう。ひとつの反作用にとらわれるならば非決定が失われてしまう。

ベルクソンは知性がより複雑で微妙なバランスを保たなければならないことを論じている。前節で見たとおり、知性が生命を捉えようとすると擬似問題、擬似創造概念などを作り出してしまって。さらにベルクソンは「道徳と宗教の二源泉」において三つの知性的困難を指摘した。利己主義による社会秩序の崩壊、死が避けられないことの予見による憂鬱、予見の失敗による知性への信頼の喪失である⁽³³⁾。以上のような困難を防ぐために知性は言わば自己の働きを抑制する機能をもつ。寓話、神話、迷信などを作り出すこの機能をベルクソンは仮構機能(fonction fabulatrice)と呼ぶ⁽³⁴⁾。先の困難に対しても仮構機能は社会を維持する仮構、死後の生命の仮構、予見の失敗を説明する仮構を作り出し、知性のバランスを保つことができる。ただしこのとき仮構機能の働きが強調され過ぎても知性は非決定を作り出せなくなってしまう。

機能のバランスを崩した創造の補助は、メカニズムを維持し

たまま、非決定を作り出せなくなる。繰り返すが、このとき生命の創造は物質の反復とまともに衝突することになる。機能のバランスが崩れるとき、多くの場合メカニズムは創造の補助という目的を見失い、その手段を目的とみなしていると言えるだろう。例えば有機体は自己の保存を目的とし、知性は認識を目的としてしまっている。認識を目的とする知性は生命を捉えようとしてしまう。

最後に創造の補助の方法論的な重要性を指摘しておく。論文集『精神的エネルギー』所収の「意識と生命」や「道德と宗教の二源泉」において、ベルクソンは交会法 (méthode de recouplement) と呼ぶ」とがである哲学的方法について論じている⁽³⁵⁾。

私はかつて『事実の線 (lignes de faits)』について語った。事実の線はどれも十分に遠くまで達しないため、真実の方向しか示さない。だがその内の一本の線を交差する点まで延長すれば、おそらく真実そのものに到達するだろう。(MR.263.)

まず科学的考察などによって得られる事実を集める必要がある。創造の補助についての考察は事実の線を明らかにする典型的な考察だろう。実際、ベルクソンは「意識と生命」において、神経系と有機体が物質の内に非決定を作り出すことを事実の線

と考える⁽³⁶⁾。そして事実の線が交差する点には「眞実」、つまり物質とは本性的に異なる生命の存在がある。科学的考察などが明らかにする事実はあくまで物質のみに関わるため、生命の存在を直接的に示すことはない。しかし例えば神経系や有機体が物質の内に非決定を作り出すという考察は眞実の方向を示す。そして事実の線の数が増すことにベルクソンの交会法は蓋然性を増す。創造の補助はこのような方法論的重要性をもつていると言うことができる。

結論

結論としてこれまでの考察にもどついて芸術製作論を考える。先に述べたとおり、ベルクソンは芸術における創造と製作を論じている。最初の問題はベルクソンが述べた芸術における創造と生命の創造、創造一般の区別についてである。確かにベルクソンは芸術家による創造を創造一般の範例とみなしている。また芸術、科学、文明一般における創造を同列に並べて論じてもいる⁽³⁷⁾。だが別の箇所では芸術の特殊性に注目していた。例えば芸術家の直観は哲学的直観とは異なるとしばしば述べている⁽³⁸⁾。また芸術家を創造に駆りたてる情動 (émotion) は芸術作品が完成すれば満足するという指摘も、芸術における創造と創造一般の区別とみなすことができる⁽³⁹⁾。では芸術制作を考える際、これらの区別にどれほど留意すべきか。ここでは明ら

かに芸術制作に関わる後者の区別のみを検討しよう。芸術制作における創造に芸術作品という明確な終点があることは芸術制作の特殊性として容易に理解できる。だが本論第一節において、それ自体は変化しない創造されたもの（被造物）から創造そのものを考へることはできないことを確認した。ということとは芸術作品から芸術制作における創造を創造一般と区別することはできないだろう。そこで本論においては芸術における創造と創造一般の区別は一応考慮しないことにする。

ベルクソン哲学における創造とは持続の自己創造であり成長である。芸術制作における創造と製作の混同を避けるためには、まず創造を正確に理解し、製作と区別することが重要だ。繰り返すが、持続の創造は創造されたもの（被造物）や創造するもの（創造者）からは考えられない、自己の新しい質の創造である。ベルクソンは次のように述べている。

完成した肖像画はモデルの外観や芸術家の本性、パレットに溶かされた絵の具によって説明される。しかしたとえ肖像画を説明するものの知識があつたとしても、肖像画のできあがりを正確に予見することは誰にも、その芸術家でさえもできなかつただろう。（EC.6.）

ベルクソンは他にも例え、「画家の才能は彼が制作した作品の影響で、作られたり、壊されたり、ともかく変化する」（EC.7.）

と述べたり、「芸術家によって描かれた独創的な線はそれ自身すでに運動の固定であり、凍結のようなものではないか」（EC.240.）とも述べて、変化しない芸術家や芸術作品から創造を考えることを批判している。これらの指摘の意図は芸術家や芸術作品を軽視することではない。重要なのは、創造論においては芸術制作そのものが一次的で芸術家や芸術作品は二次的であり、後者から前者ではなく、前者から後者を理解する必要があるということだろう。他方、製作においては形式と素材との区別が不可欠である。製作におけるこの区別は芸術家と芸術作品の区別に重ねることができる。そのため製作論においては芸術家と芸術作品の区別が強調されるだろう。

ところが本論第一節で論じた創造一般についての議論と同じように、芸術制作論においても創造と製作の混同が生じてしまう。そして擬似創造概念にもとづく誤った芸術制作論が作られる。ベルクソンは「思考と動くもの」所収の「可能的なものと現実的なもの」において、芸術家は芸術作品の観念を先に創造し、後にそれを実在化するという議論を批判した。本論第一、第二節で見たように、ベルクソンが考える創造は実在するものの創造である。芸術制作の場合は実在する芸術作品がまず存在し、その後に知性が芸術作品の観念を作り出す。しかしこのとき知性は容易に創造を製作と混同してしまう。製作の場合は観念的な形式が実在化されるから、芸術作品の観念も実在する芸術作品より先に可能的なものとして存在すると想定するのだ。

「実在的なものの内に可能なものの観念的先在を措定することで、新しいものを單なる古い要素の再配列に還元してしまう」(ES.115)。このような誤解が本論第一節で論じた実在化としての創造という擬似概念である。ただしベルクソンは芸術作品の觀念そのものを批判しているのではない。次に示すように、芸術制作において知性は積極的な役割をもつてている。

芸術制作における創造と製作の関係について考察しよう。まず創造と製作の主従を明確にすることが重要である。芸術制作における創造は自己以外の何にも支えられない自己創造であり、この意味で製作は創造そのものには関わらない。製作といえば製作はこの衝突のために芸術制作に必要とされる。製作とは素材である物質に形式を与える行為と説くことができるが、その目的は物質の内に非決定を作り出して創造を補助すること、創造を自由に通らせることがある。

本論第二節で見たように非決定を作り出す方法はさまざまであり、方法どうしにも多様な関係がある。そこで芸術制作における製作にも芸術家、芸術作品に応じて多くのバリエーションがあり、ネットワークがあるだろう。また序論で触れたように、ベルクソンは芸術制作における製作を芸術家の技術と結びつけているが、製作の方法と同じように芸術家、芸術作品に応じたさまざまな技術を考えるべきだ。当然多くの芸術家、芸術

作品に共通する方法、技術もあるはずだ。そしてこのような多様な方法、多様な技術は創造を補助するために創造されたと言ふことができる。ただし芸術制作における製作も困難を抱えているだろう。芸術制作において製作のバランスが崩壊すると、形式を与える行為が行われるにもかかわらず、非決定が作られなくなる。このとき創造の補助ではなく形式を与える行為が製作の目的になってしまっている。また創造の補助の方法論的な重要性も第二節で述べておいた。芸術制作論においても製作考察が交会法によつて物質の反復とは本性的に異なる創造の存在を明らかにするはずだ。より多くの製作を検討することで、より高い蓋然性で芸術制作における創造の存在を主張できるだろう。

芸術制作における能力の役割についても製作と同じよう理解するべきだ。製作と結びつく知性や、知性と同じく創造を補助する知覚は物質のみを捉え、生命を捉える直観と対比されるため、受容美学としてのベルクソン美学においては消極的にしか論じられない。しかし芸術制作論においては差異化の契機から統合の契機に進むことで、創造の補助という能力の積極的な役割を理解することができる。

本論は創造、製作一般および芸術制作のみを扱い、受容を考察することはできなかつた。受容論はこれから課題としたい。とはいへ本論の結論から予想して少なくとも次のようく言える。

のではないか。ベルクソン芸術制作論と同様、受容論もそれ 자체は変化しない鑑賞者、芸術作品から考える」ことがやらないだらう。本論第一節で述べたとおり、視点が絶えず質的に変化する」とがベルクソン直觀概念の特徴のひとつである。

註

(6) 「本論ではベルクソンの著作からの引用・参照を示すために略号をもつてゐる。一部の数は現行の PUF (Quadrigé) 版による。また引用内の付点は原文のイタリック体を、「中略」は「文省略を示す。」

Matière et mémoire ([物質と記憶]) = MM.

L'évolution créatrice ([創造的進化]) = EC.

L'énergie spirituelle ([精神的エネルギー]) = ES.

Les deux sources de la morale et de la religion ([道德・宗教の「源泉」]) = MR.

La pensée et le mouvant ([思考と動く]) = PM.

Mélanges ([雑文集]) = M.

(7) 「（一）「ベルクソンは藝術作品からそれがなければ藝術作品が存在やしないよくなすべき」の製作的活動を、つまりボイエーションを排除する。」

したがってベルクソン美学は純粹知覚の美学ではなきか。」

(Raymond Baye, *Histoire de l'esthétique*, Alain Colin, 1961, p.140, Cf. EC.136-166.)

(8) Cf. 同上「ベルクソンは美學の構造」[三刊]、第六五五頁、「九二九年、六七一九〇頁。龍一郎「ベルクソンに於ける「直觀」の概念——ベルクソン美學研究——」、「美學」、第二五五号、一九八八年、111—112頁。]

(9) 「（一）「ベルクソンは藝術作品からそれがなければ藝術作品が存在やしないよくなすべき」の製作的活動を、つまりボイエーションを排除する。」

(10) 「（二）「物質の形式を素材に刻み込む」とかひなる」(EC.156.)

(11) 「（三）「製作は事物の形式を素材に刻み込む」とかひなる」(EC.156.)

(12) 「（四）「知性の最初の仕事は道具を製作する」といひだした。」(中略) 知性が「己の手続きを反省し、自己が観念の創造者であり、一般的に表象能カ力である」とに気がいたときから、実際の行為とは直接関係のない事物であつても、知性はどんな事物の観念でも得ようとする。」

(13) Cf. Timothy Mitchell, Bergson, Le bon, and Hermetic Cubism.

(14) *Journal of Aesthetics*, Vol.36, No.2, winter 1977, p.174-185. Mark Antliff, *Inventing Bergson*, PUF, 1993. Ruth Lorand, Bergson's concept of art, *British Journal of Aesthetics*, Vol.39, No.4, October, 1999, p.400-415.

(4) 「藝術において技術は反復や製作といったものに関わり、創造そのものは関わらぬ。」(PM.103.)

(5) ベルクソン創造論について Cf. Raymond Polin, Bergson, philosophe de la création. *Les études bergsonniennes*, Vol.V, PUF, 1960, p.191-213. Henri Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*. Vrin, 1989. 創造と製作の区別について Cf. Vladimir Jankelevitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, p.201-215.

(6) 「意識をもつて存在において存在することは変化する」と、「変化する」とは「成熟する」とは無限に自己を創造する」とである。(EC.7.)

MM.251.

(8) Cf. 龍一郎「ベルクソンに於ける神の意識 (三) ——「哲學的直觀」の射程——」、「多摩藝術學園紀要」、第一七号、一九九三年、「一四頁。「進化」と「源泉」との間にあると看做されてゐたベル

クソン哲学の飛躍は、以上の検討から体系内に破綻を来すことなく推し進むられた正に「創造的進化」である。」(中略) これがである。

(六頁)

PM.30, 177-178.

(9) 「（一）「内的生命的流出の不可分な、そのため实体的な連續性」(PM.27.)、

「変化的实体性 (substantialité)」(PM.165.)

(10) EC.5.

(11) 「製作は事物の形式を素材に刻み込む」とかひなる」(EC.156.)

(12) EC.140. Cf. EC.136-166.

(13) 「（四）「知性の最初の仕事は道具を製作する」といひだした。」(中略) 知性が「己の手続きを反省し、自己が観念の創造者であり、一般的に表象能カ力である」とに気がいたときから、実際の行為とは直接関係のない事物であつても、知性はどんな事物の観念でも得ようとする。」

(14) EC.160.

(15) 「「これふの問題は創造であるのを製作にしてしまつた」とから生じる」(PM.105.)

(16) Cf. Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, PUF, 1966, p.7.

(17) ベルクソン哲学における誰かの創造については神と密接に関わる

- ために特に慎重な理解が必要である。無からの創造を擬似概念と考える」とは神の概念に対する批判となるだろつか。まずベルクソンは一九〇八年五月二一日のトンケテク宛の手紙において、無と存在の擬似問題と神の関係について次のように述べている。「最後に、私が無の不可能性を証明した議論は世界の超越的原因の存在を否定するものでは決してありません。」(M.766) そして無の不可能性を証明した「創造的進化」において、ベルクソンは次のような神の概念を提示していた。「神は不斷の生命であり、行為であり、自由である。このように理解すれば創造も神秘ではない。」(EC.249) これらの文章からベルクソンが神の概念を批判する意図はなかったと言ふことができる。ベルクソンが無からの創造を神の創造と考へていたのかも難しい問題である。この問題は無からの創造をどのよう理解するかにかかる。本論では存在を無に加えることを創造とみなすような誤解を批判するために、無からの創造を擬似概念と考へる。)の意味での無からの創造はベルクソンが考へる神の創造とは異なるだらべ。
- (18) EC.249.
- (19) PM.27.
- (20) Cf.PM.109.
- (21) Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, p.201.
- (22) 本論では生前の創造と非決定を作り出すものの関係を明確に説明するためには「補助」という語を使つ。この語は後に論じる非決定を作り出す多様な方法すべてに共通して使つ。創造と非決定を作り出すものの序列を端的に示すことがであります。
- (23) MM.205-206.
- (24) Cf. 梶垣立哉「ベルクソンの哲学 生生成する実在の肯定」、11000年、一八一二七頁。
- (25) MM.246-247, EC.91.
- (26) MM.203, 232.
- (27) EC.185, 205, MR.Chap.1.
- (28) EC.99-100. リリルベルクソンはいかなる補助ももたない生命の姿を描いてゐる。「生命が第一に回避しなければならない障害は剥き出
- (29) EC.115-117, ES.14-15.
- (30) MM.27.
- (31) MM.25-27.
- (32) EC.131-132.
- (33) 三つの困難は MR.131-134, 134-137, 144-146.
- (34) MR.111-114.
- (35) ES.4, MR.263-264.
- (36) ES.8-15.
- (37) MR.40.
- (38) EC.178, PC.142, 175, M.1148.
- (39) MR.44.

本論は美学会東部会平成十五年度第四回例会（十二月六日、於東京藝術大学）における口頭発表に加筆修正したものである。

しの自然の抵抗だった。生命は謙遜によってそれに成功したよんだ。」

MR.111-114.

ES.4, MR.263-264.

MR.40.

EC.178, PC.142, 175, M.1148.

MR.44.